



その日、その時

待降節が始まりました。待降節は最も早い年で11月27日、最も遅い年でも12月3日に始まります。今年の待降節第一主日は11月27日でしたから、最も早く始まった待降節となりました。

「待降節は二重の特徴をもっている。主の第一の来臨(受肉)の追憶と第二の来臨(終末時)の待望。この理由で、待降節は愛と喜びに包まれた待望の時となる」(「典礼暦年と典礼歴に関する一般原則」39参照)

「第二の来臨の待望」、神の救いの完成の時である終末の到来に向かって生きることも、待降節の中心テーマです。

「その日、その時は、だれも知らない」(マタイ24・36)

その日がいつか人間にはわからないが、救いの時が必ずやってくるという確信は、旧約時代の人々の心に深く刻まれていました。どんな絶望的な状況にあっても、国が滅びても、異国に捕囚として連行されても、その確信が失われることはありませんでした。その希望が自分たちの世代でかなえられなくとも、次の世代に「メシア(救い主)が来る」という確信を伝え続けました。

これこそ、わたしたちにまで伝えられた「神の民」の信仰です。

「人の子は思いがけない時に来る」(マタイ24・44)

その時について人間は予測するこ

ともできないし、人間の力で早めたり遅くすることもできません。

神の計らいの前に、人間は全く無力であることを自覚し、「待ち望む」ことの重さを学ぶ待降節でありますように。「メシア(救い主)が来る」との深い確信のうちに。

♪ わたしは静かに神を待つ わたしの救いは神からくる ♪

(「典礼聖歌」184)

終末におけるキリスト者の希望

今日は、神の民は最終的にどうなるのかということを手を自らに問いたいと思います。わたしたち一人ひとりはどうなるのでしょうか。わたしたちは何を待ち望むべきなのでしょう。使徒パウロは、同様の疑問を抱いたテサロニケの信徒を、新約聖書の中でもっとも美しいことばの一つであるこのことばで励ましています。「わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります」(一テサロニケ4・17)。これは簡潔でありながらも、豊かな希望を表わすことばです。このことは、ヨハネの黙示録の中に次のように象徴的に示されています。ヨハネは最後の決定的な瞬間を、使徒としての直感をもって描いています。「新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た」(黙示録21・2)。これが、わたしたちが待ち望んでいることです。教会とは、主イエスに従う民であると同時に、花嫁を迎える花嫁のように日々、主イエスと会う

ために備える民です。それは単なることば上のものではなく、現実に行われる真の結婚です。なぜなら、わたしたちと同じ人間になられ、自らの死と復活によってわたしたちすべてをご自分と一つにされたキリストは、真にわたしたちと結婚し、わたしたちをご自分の花嫁にしてくださいからです。これこそが、神が全歴史の中で織りなしている交わりと愛の計画の成就です。この歴史は、神の民の歴史であると同時に、わたしたち一人ひとりの歴史でもあります。そして、主がその歴史を進めておられるのです。

(中略)

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、イエスの再臨こそが、わたしたちが待ち望むことです。花嫁である教会は、花婿を待ち望みます。しかし、わたしたちは自分がこの期待、この希望を本当にはっきりと忠実にあかししているかどうかを自らに問わなければなりません。わたしたちの共同体は、今でも主イエスの現存のしるしのうちに生活し、イエスの再臨を心から待ち望んでいるのでしょうか。それとも、疲労とあきらめのために疲れて無感覚になっているのでしょうか。また、信仰の油、喜びの油が尽きてしまう恐れはないのでしょうか。注意しましょう。

教皇フランシスコ、2014年10月15日の一般謁見演説(抜粋)

(カトリック中央協議会 訳)



(ホームページ)